

詩仙堂における圍繞と眺望の景観特性に関する研究

京都大学大学院
京都大学

学生会員 ○山口敬太
正会員 出村嘉史

京都大学大学院
京都大学
広島工業大学

学生会員 西本慎太郎
正会員 川崎雅史
正会員 樋口忠彦

1. はじめに

景観を把握するための技術手法として、視点と景観対象との関係に着目し、視対象がどのように見えるかが重要となる眺望景観と、視点場近傍の居心地の良さなど、空間の感じ方が重要となる圍繞景観がある。

本研究では、詩仙堂を研究対象とする。江戸初期の文人・石川丈山が隠棲した詩仙堂は、これまでの研究で、その特徴的な庭園や建築が評価されてきた。しかし、さらに大きなスケールで見た場合に、詩仙堂は大きな地形環境の中でのパノラマ的な眺望と、隠棲地らしい小スケールでの圍繞性をうまく組み合わせた景観設計がなされていたことが分かった。この景観体験における小スケールから大地形スケールへの広がり、その意外性こそが、詩仙堂における景観の特徴であるといえるだろう。

そこで、本研究では、そのような視点から詩仙堂における景観構成を捉え、地形環境の中での敷地配置や景観体験場の構成分析などから、詩仙堂における圍繞と眺望の特性を明らかにすることを目的とする。

2. 詩仙堂における微地形を利用した景観操作

詩仙堂は、京都盆地の北東隅、瓜生山とその山麓に位置する里の間、東西方向の地形の傾斜が変化する高台に位置する。詩仙堂の敷地は、東と南の山によって二方を囲まれることによって身を潜められる凹地形と、

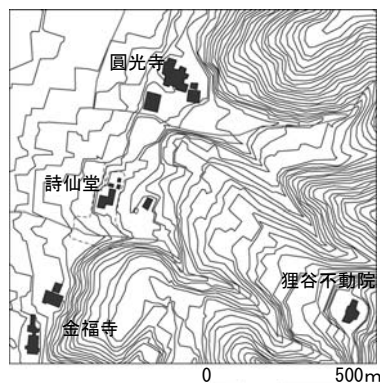


図1 詩仙堂周辺地形図
(等高線は2m間隔)

山麓の高台の尾根上という眺望を得ることのできる凸地形の地に選定された。(図1) さらに、詩仙堂は別名、「凹凸窠(おうとつか)」といい、「でこぼこした土地に建てた住居」とい

う意味がある¹⁾ように、小さな地形の起伏に富んでいる。尾根上に建築が建てられ、南の谷筋を庭園として用いている。その南に突き出た山の端部は、庭園の背景として利用している。庭園内には3つの段差があり、庭園は4つの平場に分かれ、これらは階段で結ばれている。ここでは、地形のレベル差を庭園の分節に用いている。さらに、アプローチ部では門と敷地の間の約3mの地形差を19段の石の階段で結び、このレベル差を境界として用いている。このように、地形の小さな段差によって景観体験に変化をつけている(図2)。

3. 詩仙堂内部の微地形を利用した圍繞景観の創造

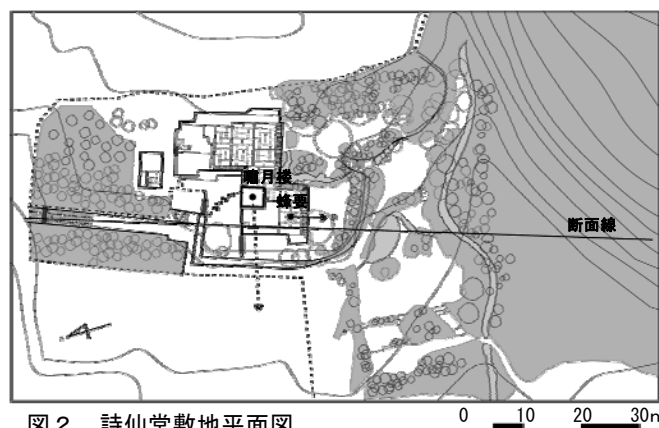


図2 詩仙堂敷地平面図

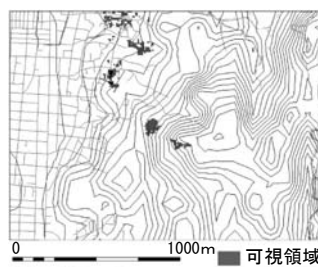


図3 蜂要からの可視領域と方丈庭園の眺め

詩仙堂建築内の主な視点場である一階の方丈「蜂要」から唯一の開口部である庭園方向を眺めると、手前に枯山水の方丈庭園が、その奥には庭園内の木々と斜面地上の木々が、三層に重なって見え、視界は木々によってほとんどが占められる。視対象はほぼ植栽で、遠景の眺望は全く得られない

Keyword 圍繞, 眺望, 地形, 視点場のデザイン

連絡先 〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 TEL&FAX 075-383-3328

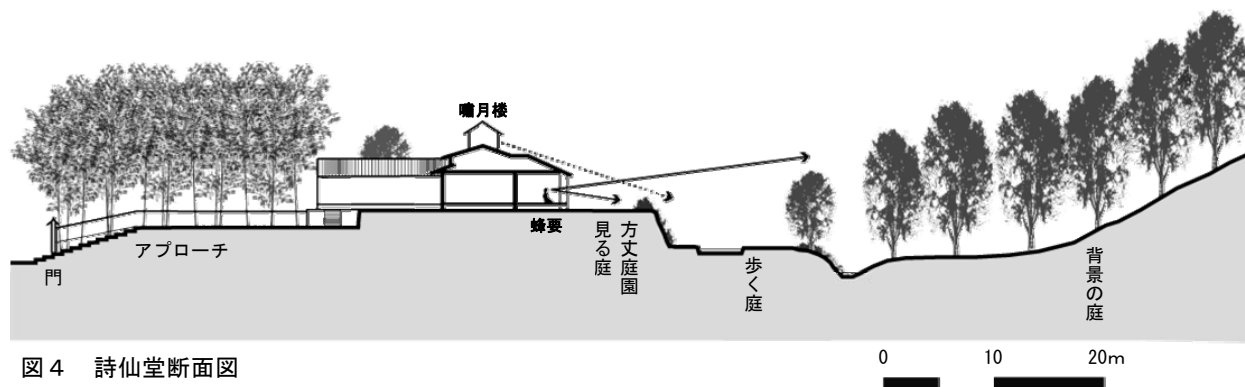


図4 詩仙堂断面図

い。斜面地上の木々までの距離は約25~30mで、仰角19度前後である。これはスプライレゲンという「囲まれ感」の最小値の仰角18度²⁾を満たす。このためには庭園南の隆起地形が不可欠であった。可視領域(図3)を見ると、視点場近傍のみに広がっていることがわかる。

さらに詩仙堂庭園をみると、これらは大きく2つに分節されている。方丈庭園は観賞用の庭であり、下段の回遊庭園は歩くための庭である。回遊庭園から眺めると、庭園間の段差と植栽によって詩仙堂の建築がほとんど隠れており、植栽がほぼ視界を占め、囲繞性が強い。このように地形の利用と視点場操作によって、隠者が隠れ棲むのにふさわしい囲繞景観が得られた。このような造景の手法は自然を手近に感じるための構成技法であると言う事ができる(図4)。

4. 嘯月楼における眺望景観の創造

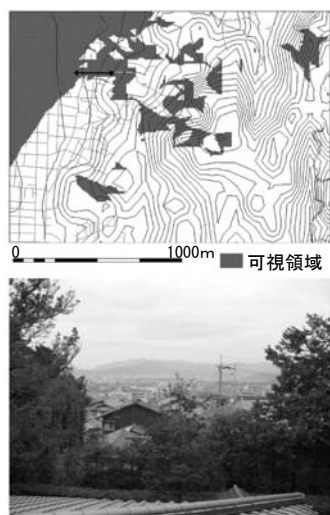


図5 嘯月楼からの可視領域と眺望

詩仙堂建築内のもう一つの主要な視点場である「嘯月楼」は、蜂要の上階に位置する三階部分の広さ畳三帖半、四方に窓が存在する物見楼である。丈山はしばしばここで主客対座して酒を酌んだ³⁾。西向きにも眺望が広がり、1階蜂要からは見えない遠く離れた洛中や西山まで見渡すことができる。

詩仙堂十二景の「洛陽晚煙」はここからの洛中の景色を詠んだものである。この嘯月楼からの眺望は、詩仙堂の敷地を越えた大スケールの眺望的性格をもっている(図5, 6)。

詩仙堂における風景の構成としては、蜂要や庭園周

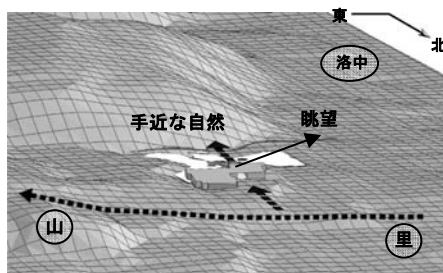


図6 詩仙堂周辺の3次元地形モデル

辺で囲繞空間をしっかりと形成した上での眺望の確保であるため、身の置きどころを失うことはない。これは、Jay Appletonの眺望-隠れ場理論⁴⁾によると、「囲われる感覚」と「広がる視界」をバランスよく得ることによって、視角的愉悦と心理的満足を得るということであろう。

5. 結論

このように詩仙堂の景観構成は、隠棲の地らしく山の中に身を潜められる囲繞景観と、洛中や西山の遠景を望む眺望景観の両方を組み合わせたものであった。また、その景観デザインは、地形の利用と造園計画、建築による複合的なデザインであった。現在は周辺の開発が進み、住宅地が広がっているが、それでもなお自然を感じられる場所となっている。この景観デザイン手法は、都市の中でも自然を感じるための手法として示唆を与えるであろう。

今後の研究の展開としては、丈山が残した風景に関する記述を文献から分析し、風景嘆賞のための環境整備の意図と手法についてさらに考察を行いたい。

参考文献

- 1) 詩仙堂丈山寺、『詩仙堂』, 1998
- 2) P.D.スプライレゲン『アーバンデザイン』, 青銅社, 1966
ここでスプライレゲンは、仰角45度(D/H=1)で「完璧に囲まれた感じ」, 仰角18度(D/H=3)で「囲まれ感の最小値」, 仰角14度(D/H=4)で「囲まれ感が消失する」としている。
- 3) 山本四郎、『石川丈山と詩仙堂』, p.121, 2002
- 4) J.アプルトン『風景の経験』, 法政大学出版局, 2005